

MATSU REKI

企画展

出雲の神々の美術
神像と神宝

贅^{ぜい}を尽くした神々の道具



「御櫛笥及内容品」出雲市・出雲大社蔵

Contents

館蔵品展「明治時代のサムライたち」	2
企画展「神々の美術－出雲の神像と神宝」	3
令和6年度のスポット展・ミニ展示	4
コラム「雲陽秘事記あらかると」第5回	5

松江おもしろ談義ダイジェスト「松江沈没」	6
歴史スポットめぐり —松江城三之丸跡—	7
INFORMATION：ホーランエンヤ写真ギャラリーの開設	7
地域ゆかりの資料紹介 —東出雲町編—	8

明治時代の サムライたち

松江藩士の行く末

松江藩が廃され、島根県が誕生し、武士が禄を失った明治時代。急速に変化する時代を旧松江藩士はいかに生きたのか。新たな学校制度の元で身を立て、京都帝国大学の教授となった三浦周行をはじめ、社会の変革期における士族の生き様を追う展覧会です。



「帝国大学生三浦周行の時間割」明治23年（1890）頃 当館蔵

松江で生まれた三浦周行^{ひろゆき}は、18歳で東京へ出て研鑽を積み、明治23年（1890）帝国大学に入学しました。三浦周行家文書の中に残るわずか12cm×7cmの紙片に、帝国大学時代の周行が修めた学科が記されています。周行は、やがて京都帝国大学に新設された国史学第二講座の教授となり、立身成業を果たします。

三浦周行博士の履歴書

明治4年（1871）	旧松江藩士三浦家の長男として松江に生まれる。幼名は録之助。
明治11年（1878）	島根県松江師範学校附属小学校入学。
明治16年（1883）	松江中学校（のち島根県尋常中学校）入学。
明治21年（1888）	上京。私立東京英和学校に入学。
明治23年（1890）	帝国大学（現在の東京大学）に入学。
明治25年（1892）	周行と改名。
明治26年（1893）	帝国大学文科大学国史科修業。父正祐 ^{まさすけ} を亡くし、三浦家の家長となる。
明治28年（1895）	帝国大学文科大学史料編纂掛に採用される。
明治42年（1909）	京都帝国大学（現在の京都大学）国史学第二講座が設置され、教授に就任する。
昭和6年（1931）	教授を退任。9月6日没。



島根県出身の肖像画家石橋和訓^{かずのり}がロンドンで描いた京都帝国大学教授三浦周行の姿。

三浦周行博士の姿

※写真パネルを展示

館蔵品展

明治時代のサムライたち —松江藩士の行く末—

令和6年(2024) 1月26日(金)～3月31日(日)

【休 館 日】 毎週月曜日※2月12日（月・祝）は開館。
2月13日（火）は休館。
【開館時間】 9：00～17：00（観覧受付は16：30まで）
【会 場】 松江歴史館 企画展示室
【主 催】 松江歴史館

【観 覧 料】 大人 300円（240円）
中学生以下、高校・大学等に通う学生 無料
※高校・大学等に通う学生は学生証の提示が必要です
※基本展示室とのセット券の料金は大人650円（520円）
※（ ）内は20名以上の団体料金

開催予告！

神々の美術

出雲の神像と神宝

企画展

この展覧会では島根県出雲地方の寺院や神社に伝わる神々に関する貴重な文化財を数多く展示します。出

雲は神々の国と言われ、出雲の神社には数多くの文化財が遺されています。今回の展覧会では、その文化財の中から、神々の姿を表した神像と、神社に奉納された神宝を展示します。普段は公開されない国宝や重要文化財に指定された貴重な神像と神宝も展示します。出雲の神道美術の素晴らしさをあらためて知ることのできる展覧会です。

島根県指定文化財「木造牛頭天王坐像」
平安時代（12世紀）、出雲市・鰐淵寺蔵



島根県指定文化財 木造牛頭天王坐像

鰐淵寺は島根県を代表する天台宗の古刹です。像は頭に牛頭を載せ、顔は三面です。体は武将の姿で、両手で何かを握る形で坐っています。牛頭天王はスサノオと同体とされます。中世において出雲大社の祭神は現在のオオクニヌシノオオカミではなくスサノオとされ、当時出雲大社と深い関係にあった鰐淵寺でもスサノオを信仰していたので、牛頭天王像が祀られたのでしょう。



重要文化財 兵庫鎖太刀

重要文化財「兵庫鎖太刀」鎌倉時代（13世紀）、出雲市・須佐神社蔵

須佐神社はスサノオを祀る神社で、パワースポットの大杉で有名です。兵庫鎖太刀とは、「兵庫鎖」という鎖で腰に下げる太刀です。この鎖を使用した太刀が9世紀から13世紀頃まで公家や武家ともにありました。この太刀は、銅の地金に鍍金が施されています。現在はくすんでいますが、制作当初は金色に輝いていたことでしょう。太刀を入れた箱に墨書があり、天文21年（1552）に尼子晴久が須佐神社に奉納したことが分かります。

企画展

神々の美術－出雲の神像と神宝

令和6年（2024）4月26日（金）～6月16日（日）※会期中一部展示替えがあります。

【休館日】毎週月曜日※ただし4月29日（月・祝）、
5月6日（月・祝）は開館。
5月7日（火）は休館。
【開館時間】9：00～17：00（観覧受付は16：30まで）
【会場】松江歴史館 企画展示室
【主催】松江歴史館

【観覧料】大人 500円（400円） 小・中学生 250円（200円）
※高校・大学等に通う学生は学生証の提示で団体料金
※基本展示室とのセット券の料金は大人800円（640円）、
小・中学生400円（320円）
※（ ）内は20名以上の団体料金

スポット展

会場：基本展示室最終コーナー(要基本展示観覧券)

不昧の茶室—大崎茶苑に行ってみよう

4月2日(火)～5月26日(日)

大名茶人として知られる松江藩松平家七代藩主・松平治郷(号・不昧)は、いくつもの茶室を建てさせそこで茶会を催します。特に不昧が隠居後を過ごした大崎(現東京都品川区)の松江藩下屋敷は、11もの茶室が点在する大茶苑でした。本展ではこの大崎茶苑にあった茶室について、当館の収蔵資料等から紹介します。茶室の外観を記録した絵画や詳細な平面図を見ることで、不昧がどのような環境で茶を楽しんだかが想起されてくることでしょう。



「雲州侯大崎別業景図巻」部分、当館蔵

神様の食器—野原町八幡宮の七十五膳神事用木椀—

10月1日(火)～11月24日(日)

中海に面する野原町の八幡宮では、毎年10月14日夜に「七十五膳神事」が行われています。蒸した玄米をまぶした団子を木椀に盛り、ハシ(箸)と呼ばれる紙垂をはさんだ松材を添えて、神前に供える儀式です。この神事で用いる木椀には、寄進年や寄進者とみられる名前が記されています。中でも古いのは、堀尾氏の家臣伊藤宇右衛門尉が寄進した木椀16客で、慶長13年(1608)の墨書があります。400年以上の長きにわたり、神事で使われながら継承され、令和5年2月20日に松江市指定有形民俗文化財になった木椀を、指定後初めて公開します。



「松江市指定文化財 野原町八幡宮の七十五膳神事用木椀」八幡宮所蔵(当館寄託)

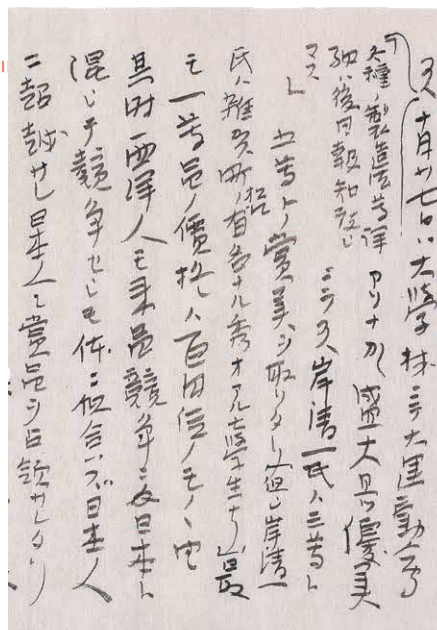
ミニ展示

会場：展示室前展示ホール(観覧無料)

青年 岸清一の姿

7月30日(火)～9月29日(日)

松江の雑賀町で生まれ、大日本体育協会の会長として幻となった昭和15年(1940)の東京オリンピックの誘致に尽力した岸清一。東京大学の学生であったところからスポーツ、特にボート競技にのめりこんでいたことが伝記「岸清一伝」に記されています。今回紹介する資料は、松江から東京農林学校に入学した学生(柳多平之助)が松江の父へ送った近況報告で、岸清一が運動会で賞を獲得したことなども記しています。当時の学生が見た若き日の岸清一の姿を紹介します。



「柳多平之助書状」部分、明治21年(1888) 11月1日付、個人蔵(当館寄託)

松江の郷土玩具

11月26日(火)～1月26日(日)

各地の風土や歴史に合わせて作られてきた郷土玩具。一時は、作り手の減少などにより、廃絶の危機を迎えましたが、今、郷土玩具は、全国的に再注目されています。

歳徳宮をモチーフにした「松江お宮さん」、松江の蒸気船、子供の成長を願い、端午の節句に飾る「かざり馬」など、いずれも松江で昔から作られている玩具です。懐かしく思われる方も多いのではないのでしょうか。懐かしくかわいらしい松江の郷土玩具を展示します。



「かざり馬」当館蔵

松江歴史館基本展示

利用案内

休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌平日)
開館時間 9時～17時(観覧受付は16時30分まで)
会場 松江歴史館基本展示室

基本展示観覧料

大人 510円(410円)
小・中学生 250円(200円)
※()内は20名以上の団体料金で2割引です。

年間パスポート

大人 1,560円
小・中学生 780円
※1年間(発行日の翌年同月末日まで)有効。
松江歴史館の基本展示と企画展示、松江ホール・エンヤ伝承館が何度でもご覧いただけます。

第5回

雲陽秘事記

あらかると



松江歴史館
名誉館長 藤岡 大拙

雲陽秘事記

何時、誰が著したか分からないが、人から人へ書き写されて伝わった逸話集。松江藩松平家初代藩主直政から六代藩主宗衍むねのぶの時代までが取り扱われ、後、八代藩主斉恒なりまでが追記された。収録された約二百話にも及ぶ記事は、虚実混交の憾みうらみがあるとはいえ、よく吟味して読むと、松江藩の歴史の深叢ふかそうに分け入ることができる。

下人仰討の事

雲陽秘事記をめくっていたら、表題のような見出しが目にとまった。はて、仰討とは聞きなれぬ言葉だと、『日本戦国史国語辞典』をひもとけば、「現代語は上意討ち。主人の意志を受けて人を切ること」とある。そこで、どんな内容かと、読んでみると、およそ次のようなことであった。

松平直政が松江藩主であったころ、すなわち、寛永十五年（一六三八）から寛文六年（一六六六）までの約三十年間での出来事である。

家臣の何某なる者が、町人に「慮外りやがい」なことをされたので、それを咎めて手打ちにせんとした。慮外とは、たくさんの意味があるらしいが、ここでは、「思いもよらぬ不法」「不埒なこと」「無礼なさま」といったことであろう。町人の慮外が具体的にどんな行為であったかは分からないが、相応な侮辱を与えるものだったに違いない。とにかく、

く、家臣は町人を「そこへなおれ」と座らせ、刀の束に手をやったのである。すると、道行く人々から声がかかった。その声は武士以外の声だったろう。後には町人の旦那寺の僧侶も入ってきて、しきりに懇願するので、手打ちはだんだん延引し、最終的には町人は討たれなかったのである。まことに、喜ばしい話ではないか。

この事件のことを聞いた直政は、近習の者にこう話した。

「このたびの一件は、町人の行いは言語道断、不届千万である。上かみを恐れざる行為である。そこで、何か物をもって断りに行くべきであろう」

近習よりこの町人の旦那寺へ、その旨が通知された。町人は大いに喜んで、さっそく品物を準備して、かの武士の家に持参した。ところが、町人が進物を持って武士の門前に至ったとき、何者かが町人を斬り捨てたのである。家中（家臣たち）の噂では、斬ったのはかの武士の仕業ということだった。家老たちはこの事件を直政に報告した。

ところが、直政が言うには、

「かの武士がやったのではない。余が近習に命じて斬らせたのじゃ。何故ならば、脇から町人どもの声によって、かの武士は斬ることが出来なくなっていた。そこで、余が替わって、近習に命じて斬らせたのだ。こんな奴は斬り捨てたほうが、後のよい手本になるからだ」と。

筆者評

なんとも恐ろしい話である。身分制を壊すような行為に対し、これを堅持しようとする体制側の強硬な態度を見ることができるのではないか。徳川初期の封建制再編成期の一齣ひとしきりである。もちろん、ほかの大名たちも、同じ意識をもっていたに違いない。

松江おもしろ談義ダイジェスト

令和5年8月講演

松江沈没

—明治26年の大水害—

講師…主任学芸員 新庄 正典

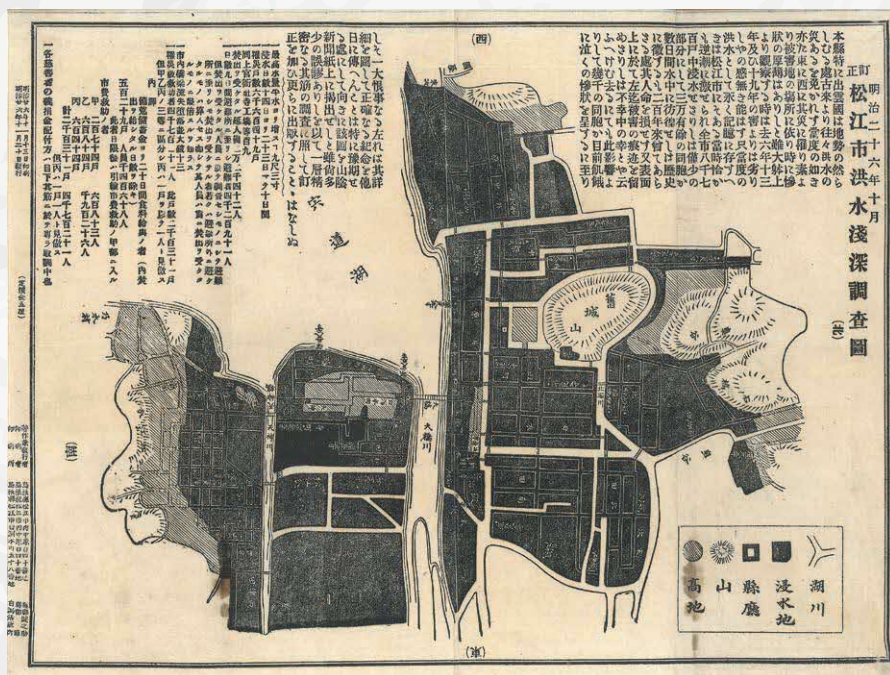
明治二十六年（一八九三）十月に起こった松江の大水害について、新出の日記とともに紹介しました。この大水害は台風による暴風雨が原因で、松江に限らず西日本各地で影響が出ました。島根県では死者が六十二名、行方不明者が二一四名、浸水家屋二六、一〇〇余棟、家屋建物の損壊七、四五六棟もの被害が出たのです。

この時の様子は、当時の新聞や松江中学校教諭の西田千太郎が残した『西田千太郎日記』で詳細に述べられています。新たに確認した松江高等小学校の生徒である松本藤吉（十三才）が残した『日記帳』にも水害について述べられており、『西田千太郎日記』とともに紹介しました。

十月十四日には、兩日記とも暴風雨が家屋や塀などを倒し、十五日から浸水し始め、雑賀地区に住む西田家では家族が親類の家に避難したこと、寺町の松本家には親類が避難してきたことが記されています。十六日は浸水が最高になり、西田家では床上二尺（約六十センチ）まで浸水しています。水害から四日目となる十七日になると、『西田千太郎日記』では「米商等貯米ヲ発売セス、価格暴騰」とあり、松本藤吉『日記帳』では「窮民ノ飯ハ粥トナリ」と記され食料不足が問題となったことがわかります。しばらく浸水は続きますが、二十二日に「水ハ常ノ水ニナリ」とようやく水が引きました。この水害で被害を被った人々へ島根県民やゆかりのある人々から多くの義援金が寄せられ、その中には熊本市在住の小泉八雲が島根県知事の義援金と同額の五十円を寄付していました。一三〇年前の出来事ですが、当時の日記から生々しい被害の状況を紹介しました。

松江歴史館では、毎月一回一時間毎異なるテーマを設けて、松江の歴史やゆかりの美術のお話をする「松江おもしろ談義」を開催しています。今回は令和5年8月の講演の内容をダイジェストでお届けします。

市内ほぼ全域が水没（黒塗りが浸水エリア、斜線が高地）

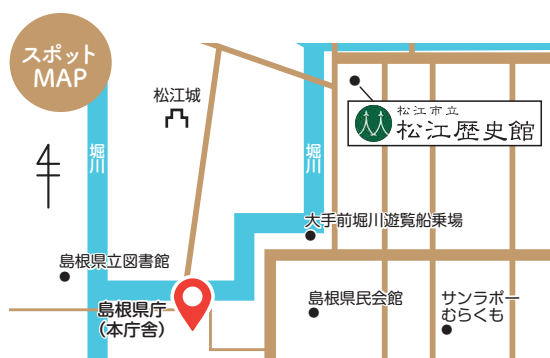


「松江市洪水浅深調査図」明治26年（1893）、当館蔵

ひと足のばしこ
歴史 スポットめぐり

…………… 松江城三之丸跡 ……………

松江歴史館から歩いて8分、史跡松江城の南にある島根県庁の敷地は、かつて三之丸という松江城の曲輪の一つでした。モダニズム建築の島根県庁舎本庁舎が建つ場所には、松江藩の政庁と藩主の邸宅があったのです。国宝松江城天守のある丘陵部と独立して、平地に築かれた三之丸は、堀によって区画されていました。およそ400年前の松江城下町絵図には、四方を堀に囲まれた三之丸と、その内部に建物があった様子が描かれています。松江藩二代目藩主堀尾忠晴の時代のことです。明治時代になり、門や御殿といった建物が解体されましたが、堀に面する石垣は現存し、三之丸の姿を留めています。島根県庁の敷地内には、発掘調査によって見つかった南側の内堀石垣の位置を示す砂利敷きや説明板、「松江城三丸 舊 趾」の石碑が建ち、松江城の歴史を偲ぶことができます。



三之丸の石垣と島根県庁舎本庁舎

Information

松江歴史館
からのお知らせ



松江ホーランエンヤ伝承館ホームページ
写真ギャラリーの開設

松江歴史館の東隣にある松江ホーランエンヤ伝承館。この伝承館のホームページにこの度、写真ギャラリーを開設しました。ホーランエンヤは10年に1度、松江城内にある城山稲荷神社の御神霊を東出雲町の阿太加夜神社まで船でお運びし、出雲国内の安定や豊作をお祈りし還ってくる船神事です。現在は大橋北詰棧橋から約100隻の船行列が繰り広げられていますが、以前は北惣門橋西詰や乙部灘（松江歴史館北側の川沿いにある船着き場）で神輿を船に寄せ、四十間堀川などを通して行きました。写真ギャラリーでは、大正4年（1915）からの写真を見ることができます。現在とは違った航路や周囲の風景など、新たな発見もあるかもしれません。

松江ホーランエンヤ伝承館HP

<https://matsu-reki.jp/ho-raneya/>



大正4年（1915）のホーランエンヤ

地域ゆかりの資料紹介

わがとこに、
何があるかね？

出雲弁で
「わたしたちの地域に
何があるの？」
という意味。



松江歴史館は、松江市域ゆかりの歴史資料や美術作品を多数収蔵しています。このシリーズでは、収蔵資料や近年調査した資料などを地域ごとに紹介します。

東出雲町編

東出雲町の意東は、古くから窯業が盛んで、磁器や煉瓦・瓦などの生産が行われてきました。その中に、松江藩の殖産政策の重要な産業の一つとして生まれた「意東焼」と呼ばれる磁器があります。

意東焼は、意宇郡下意東村（現、東出雲町下意東）にあった藩窯で作られた磁器のことで、白い地に呉須釉と呼ばれる青い釉薬で絵付けをおこなう染付という技法で作られ、大皿・徳利・猪口・花器をはじめとした日常雑器が多く伝わっています。意東焼に描かれる文様は、山水や唐草、花鳥文様が多く、さらに「長歳山天保製」や「雲陽長歳山製」と銘が記されているものも数は少ないですが、伝わっています。

意東焼の歴史は、天保三年（一八三二）ごろに、意宇郡下意東に他領から多くの

職人を招き、磁器の生産が開始したことから始まります。操業期間については、

七～八年と極めて短かったものの、藩内の磁器の自給率を上げるため、多くの意東焼が作られたといわれています。

磁器は、近世前期に日本に入ってきたもので、南京焼と呼ばれた中国の磁器と肥前国伊万里で作られた磁器が日本国内に流通していました。当時、磁器の需要の高まりにより、日本各地で染付の磁器が作られ始めていた頃でもあり、意東焼は、その需要の高まりによって作られ始めた磁器だともいえます。すでに流通している磁器の代わりに松江藩内で生産した磁器を流通させることができれば、それだけ藩内に流通するお金が増えて、豊かになるという発想から藩直営で磁器を作るに至りました。さらに、意東焼を領内で流通させるため、松江藩内での伊万里焼の売買を禁止し、松江藩領内における磁器の販売を、藩に認められた商人を

通じてしか行えなくします。

ところが、天保五年（一八三四）には、許可された商人以外にも磁器の販売を行っている商人がいることが分かったため、藩は磁器の在庫を抱える商人全てに対し、在庫の数量を藩に報告することを義務付けました。意東焼の製作が軌道に乗るよう藩は尽力したものの、売上が少ない上に製作費がかさんだことなどから経営難に陥り、意東焼の操業は、天保十三年（一八四二）には休窯し、ついに二年後の弘化元年（一八四四）には廃窯してしまします。

その後、意東焼の製作にかかわっていた人々が個人で窯を築き、長歳山焼、鳩峯焼・金成山焼という窯が作られたものの、長くは続かなかったようです。ただし、短い操業期間だったが故に、意東焼の希少性は増し、現在も出雲地方では大事に伝わっています。

（副主任学芸員 大多和 弥生）



▶ 意東焼染付小鉢
意東焼と考えられる小鉢。氷が割れたように見える線と梅文を散らした意匠です。



▶ 底裏
底裏に「松江／東山」と記されています。確認されている意東焼の銘は「長歳山天保製」や「雲陽長歳山製」などがあり、本作はそのどれにも合いません。おそらく藩窯で作られた以降の作品だと考えられます。